

2016年度教師海外研修(エチオピア) 研修報告書

学校名	江南市立古知野南小学校	氏名	加藤 千智
-----	-------------	----	-------

<印象に残る写真2点>

●写真1 [9070]

エチオピアでの最後のワーク

「学び合う仲間へ」みんなへのメッセージ、みんなからのメッセージ。エチオピア研修での1番の宝物はたくさんの人との出会いとかけがえのない仲間の存在。ステキな出会いに感謝!



●写真2 [2703]

インタビュー

「Hi!」と声をかけると、とても親切にインタビューに答えてくれた。声をかけるのに勇気が必要だったけど、その一歩がすごく大切だと感じた1枚。



1. 現地研修に対する各自の目的とその達成度

(特に、現地研修の経験を生かす授業実践に資することについて)

「視野を広げたい!自分は何ができるかを知りたい!」という2つの理由がこの研修に参加した大きな目的だった。この研修に参加して、ポジティブに考えること、多面的・多角的に考えることの大切さを学ぶ事ができた。今後は、自分の思いだけでなく、相手の立場に立って考えることができるように、色々な視点から物事を捉える力を身につけていきたい。

今回の研修に対する目的の達成度はとても高い。実際に自分の目で見て、感じて、現地に行ったからこそ学ぶことがたくさんあった。今回のエチオピアでの研修を通して自分に何ができるかを考えた時、自分が感じたエチオピアについてそのままを伝えることだと思う。クラスでは、エチオピアに対して「途上国」「何もない」「かわいそう」というイメージをもっている児童が多い。しかし、「I'm happy!」と笑顔で答えた彼らはかわいそうな存在ではない。クラスの子どもたちに世界には色々な文化や背景をもつ国があり、相手を尊重して考えることがすごく大切なことであること、それは自分たちの身近でも同じ事が言えることを伝えていきたい。

2. 訪問国から学んだこと(気づいたこと、わかったこと、大切に思ったことなど)

(1) 柱1「訪問国に肯定的に出会う」という観点から

教師海外研修に応募しようと決めた時、エチオピアに対するイメージはほとんどなかった。研修に参加するうちに、エチオピアはコーヒーとマラソンが有名なことを知った。インターネットや本で調べてもエチオピアに関する情報は少なく、どんな国なのかどんな生活をしているのか等、具体的なイメージを持つことは難しかった。

実際にエチオピアを訪れて、「エチオピアは遠い！」と思っていたが、実際に訪れると「思っていたより近い！」というのが第一印象だった。「意外に近い」と思えたことで、これまで遠い存在だったエチオピアやアフリカが身近に感じられた。赤土が広がり、自給自足の生活をしているかと思っていたが、近代的な建物も多く、整備された道路に自動車が走っていた。道路を走っている車の多くは、TOYOTA の車だった。日本とエチオピアは全然違う国だと思っていたが、似ているところがたくさんあると思えたことが肯定的な出会いの第一歩だったように思う。

(2) 柱2「日本と訪問国とのつながりや同一性を理解する」という観点から

青年海外協力隊や専門家の活動、カイゼンの取り組みや給水設備など多くの日本をエチオピアで見ることができた。道路を走っている車はほとんどが TOYOTA の車だった。エチオピアでこれほど多くの「日本」を見ることができるとは思っていなかったので、すごく驚いた。

また、現地の小学校の校舎の壁には、世界地図や元素記号の表があり、日本の学校でも見覚えのあるものがたくさんあった。日本でもエチオピアでも同じような内容を学習していることを知り、親近感をもつことができた。また、学校を案内してくれた先生の「I'm proud of my work, as a teacher」という一言がとても印象に残った。エチオピアでも誇りをもって先生という仕事に向き合っている人がいることを知り、とても嬉しかった。何より、これから自分が胸を張ってそう言えるように仕事と向き合っていきたいと強く感じた。

(3) 柱3「共通の課題について共に考え・共に越える」という観点から

エチオピアと日本の共通の課題は「すべての子どもが安心して笑顔で暮らせる社会を作ること」ではないだろうか。今回のエチオピア研修を通して、「Are you happy?」と多くの人に聞いた。エチオピアの人々の「YES!」という答えを聞く度に、自分のクラスでは何人の子が「YES!」と答えることができるだろうと考えさせられた。教育の課題や置かれている状況は、国によって様々である。日本では、不登校やいじめ、児童虐待などの報道をよく見かける。エチオピアでは、教材教具が十分であるとは言えない状況の中で教育活動を行っている。教育の重要性が認識されていないために、学校に通っていない子どもがたくさんいる地域もあった。しかし、どこの国でも教育を受けること、安心して学校に通えることはすごく大切なことだと強く感じた。そうした環境が整っていくことで、子どもたちの夢や想いが明るい未来へと繋がっていくと思う。

3. JICAの国際協力事業の「良い!と思ったところ」と「今後あるといいなと思う視点」

「良い!と思ったところ」は、現地の生活や現地で活躍する日本人の活動を間近で見られたことである。この研修に参加するまではエチオピアという国に対するイメージはほとんどなく、日本から遠く離れたエチオピアで活躍する日本人がいることも知らなかった。この研修を通して、インターネットや本などから得た知識も大切だが、実際に自分が見たり感じたりしたことがどれほど大切であるかを知ることができた。

4. 訪問先ごとの「感じたこと」や「学んだこと」

① JICA エチオピア事務所（所長面談、理数科教育アドバイザー説明）【加藤／近藤】

所長面談では、エチオピアの国について話をしていただいた。日本からは、教育支援、インフラ整備、食料支援、農業支援など様々な方法で支援をしていることが分かった。日本とエチオピアは似ているところがたく

さんあり、外国人との接触が少ないため、独自の価値観や文化を大切にしているところがあることや、外から学ぶ事に積極的になれない面があることを教えていただいた。その中で1番印象に残ったことは、「国際人とはどのような人か」ということである。国際人とは相手の国の価値観と日本についてのことの両方を知っていることが大切だと教えていただいた。

理科教育アドバイザーからの説明では、エチオピアの教育の制度や現状を聞いた。エチオピアでは教員の意欲も低く、給料も安定したものではない。先生自身が十分な教育を受けていないことや教材が不足していることで、学校に通っていても正しい知識を学ぶことが難しい。学校に通っている子が何をどのようにして学ぶかが課題になっていることを教えていただいた。(加藤千智)

⑦ 2000 Habesha Cultural Restaurant (エチオピアの料理と伝統ダンス) [油科/加藤]

エチオピア料理といえば「インジェラ」。テフ粉を発酵させて焼いたクレープのようなもので、鉄分やカルシウムが多く含まれ、グルテンフリーの健康食である。エチオピアでは、右手を使ってインジェラにワットと呼ばれる具を包みながら食べる。事前にエチオピアに関する本を読んだが、「腐ったぞうきん色したクレープ」と書かれていた。インジェラは発酵させて焼いているため、独特の酸味があり、Habesha Cultural Restaurantでもこのインジェラを食べた。インジェラレベルは5段階中2程度で日本人でも食べやすい味だった。エチオピアの伝統ダンスは、5種類の弦楽器でリズムカルに音を刻み、それに合わせて華やかな衣装で踊る姿は、見ただけでもとても楽しい気分になった。エチオピアは植民地化されたことはなく、独自の文化をととても大切にしてきたと教えていただいた。エチオピアの料理と伝統ダンスは、エチオピアでこれまで大切に受け継がれてきた文化だと感じた。(加藤千智)

⑭ 青年海外協力隊(陸上競技)活動 [加藤/油科]

Abebe Bikila Stadium でエチオピアのナショナル陸上チームが練習しているところを見学させていただいた。陸上の大会でメダルをとる選手は、みんなこの Abebe bikira stadium で練習している。エチオピアはマラソン大国であるが、その強さの秘訣は、首都アディスアベバが標高 2,500 メートルという立地、鉄分が小麦の3倍、カルシウムが小麦の 25 倍もあるテフ粉を使ったインジェラを毎食食べていること、アベベなどの成功例があることでエチオピアンドリームとして目標にしやすいこと等がある。青年海外協力隊の活動としては、選手への陸上指導だけでなく、栄養指導や小学校での陸上指導も行っている。陸上の練習で大切にしていることは、楽しいと思える練習から始められるようにするために、選手とのコミュニケーションを積極的に行うこと。また、手の振り方や足の接地、走る時の姿勢を中心に速く走るためのポイントも教えてもらった。(加藤千智)

⑮ エチオピアでの飲食全般(各地でのコーヒーセレモニーを含む) [加藤/松田]

エチオピアでの主食はインジェラという名前のクレープのようなものだった。テフ粉を原料にして作られており、発酵させてあるので独特の酸味があるのが特徴だった。アディスアベバで食べたインジェラは酸味も少なく食べやすいものもあったが、地方の方に行くと酸味が強くなっていった。ギンボでのインジェラ体験教室では、現地の家庭で実際にインジェラを作るところを見せてもらい、実際に自分たちで焼くことも体験させていただいた。インジェラは、クレープを焼くイメージでいたが、バケツいっぱい生地を作り、焼くのではなく蒸し上げて作っていた。想像していたことと違うところがたくさんあり、やっぱり実際に体験することはすごく大切なことだと改めて感じた。

エチオピアでは、コーヒーが大変有名で、滞在中に何度もコーヒーを飲む機会があった。中でもコーヒーセレモニーは、とても印象に残っている。丁寧に時間をかけてコーヒーを入れてくださることで、相手への歓迎やおもてなしの気持ちが伝わってきた。エチオピアではコーヒーにミルクを入れることはあまりなく、ブラッ

クかたっぶりの砂糖を入れて飲むことが多かった。

5. 来年度参加する先生へのアドバイス（持ち物、必要な準備、学びの視点、注意事項など）

<お土産係として> 青年海外協力隊の方へ渡した物で喜んでくれたものランキング

1位 鯖缶（エチオピアは内陸国で魚が手に入りやすく、開けたらすぐに食べられるため）

2位 みそ汁（かに汁、しじみ汁などの魚介系のエキスが入ったものが人気でした！）

たらこパスタのもと（現地だとトマト系のものしか手に入らないため。やっぱりここでも魚介系が人気でした！）

3位 おかし（うまい棒やチョコパイなど）

缶詰（鯖やさんまの味噌煮・みぞれ煮）、みそ汁（かに汁・しじみ汁・具たくさん豚汁）、あまい系（キャラメル・ハイチュウ・ぷっちょ）など同じような種類でパターンを変えて袋に詰め合わせにしました。何人かの青年海外協力隊へ同じタイミングでお渡しする機会があり、みなさんで交換して食べてくださいとお渡ししたら、少しずつ何種類かを食べられると喜んでくれました。

<持ち物> エチオピアの気候と聞いて全然イメージが付かなかったが、首都では、夜はウルトラライトダウンとパーカーを羽織ってちょうど良いぐらいだった。逆に田舎の方に行くと、半袖で過ごせるぐらいの温かい気候だった。訪問国の気候を知り、どれくらいの服が必要か事前に確認しておく準備しやすくなると思う。

<予防注射> 予防注射は種類によって受付してくれる曜日や時間が指定されているものや、1種類打ってから別の注射を打つまでに期間を開けないといけないもの、効果が出るまでに期間が必要なものがあり、計画的に打たないといけない場合が多かった。仕事を言い訳に確認するのが直前になってしまったので、予定を調節して注射を打ちに行くのが大変になってしまった。

<学びの視点> 現地に行くまでどんな研修になるか分からないところだらけだと思うが、漠然としたものでも授業のイメージがあると、「教材としてこれを写真に撮ってこよう」とか「こんなものがほしい」等の具体的なイメージが持てる。

6. その他全般を通じての感想・意見など

今回は貴重な経験をさせていただき、本当にありがとうございました。小学生の頃、青年海外協力隊のOBの人たちが主催するキャンプに参加したことがきっかけで途上国支援に興味をもった。青年海外協力隊としての活動や現地での生活の様子を聞き、自分の生活と全然違うことに驚いた。世界は広く、たくさんの国があり、そこには色々な文化や考え方があることを知った。また、自分と同じ年の子が満足な食事を取ることもできず、学校に通うこともできない状況で生活していることに衝撃を受けた。途上国支援に携わることは自分の夢でもあった。今回エチオピアを訪れたことは、自分にとってかけがえのない時間となった。実際に自分の目で見ることで、これまでとは違う視点から見えてくるものがたくさんあった。

今回の研修を通して、「肯定的に出会う」ことの大切さを学んだ。小学生のころに参加したキャンプでは、主催してくれたみなさんが肯定的に途上国や開発のことを教えてくれたことが自分への興味に繋がったと改めて考えることができた。自分は今、教師として教壇に立っている。子どもたちの「途上国」「エチオピア」「援助や支援」という言葉を聞いて、どんなことをイメージするだろうか。国際理解教育を実践するにあたって、子どもたちが肯定的に世界と出会うことができるように授業実践に向けての準備をしていきたい。

以上